第2章

できることから支援の輪をつなごう
（横のつながり）

この章では，保護者，地域，関係機関など横の連携をはかることによって，幼児・児童・生徒の育ちを支えた事例を紹介します。

それぞれに「個別の教育支援計画」を活用しているのですが，策定の手順は，どの事例も同じではありません。策定に至るきっかけが違うからです。きっかけは，すでに作成してある「個別の指導計画」や家庭訪問でのメモ，支援会議の記録，日常的なやり取りの記録など多岐に渡ります。このように，すでにあるものの中から，「個別の教育支援計画シート」の項目に合う部分を転記したり，追記したりすることをきっかけに，策定が進んでいきます。

第１章の２で述べたような典型的な手順を参考にしながらも，「今できている部分は何か？」「どんな進め方ならできそうか？」という視点が大切になります。一人一人を取り巻く状況は，同じ学校内でも様々です。その都度，臨機応変に取り組むことこそが，一人一人のニーズに応じることにつながるのです。

事例1 まずは,保護者の願いに寄り添いながら・・・

校内委員会を中心に校内体制を整えて

小学校特別支援学級　1年（女子）

入学時から特別支援学級に入級して小学校生活をはじめたナツコさん。新しい生活に慣れた頃から特別支援学級で国語と算数の学習を始めました。すると,保護者から「一年生の時ぐらいは,できるだけ原学級の友だちと生活するようにしてほしい」との申し出がありました。保護者の意向も大事にしながら,ナツコさんに合った教育課程にしていくためにはどうすればよいか校内委員会で検討しました。

この時期のナツコさんにとって,国語や算数の学習も原学級で行うことが大切と考え,支援員などが原学級での支援に入れるように時間割を調整したり,保護者を含めた関係者が個別の指導計画の作成やその評価に参加したりすることにしました。ナツコさん理解を共に進めながら保護者との信頼関係を確かなものにしていきたいと考えました。

STEP1 支援のスタート　～ナツコさんはどんな子？　そして保護者の願いは？　～

入学式から１週間。ナツコさんは原学級で生活しています。着替えなどはゆっくりですが，友だちと話したり遊んだりすることが大好きです。

原学級では教科の学習も始まりました。当面は生活基盤を原学級におき，国語と算数の学習は特別支援学級で進めようと原学級担任と特別支援学級担任が相談し支援を始めたところ，母親から「国語や算数も原学級で学習させたい」と申し出がありました。母親の話をじっくりお聞きする中で，入学前の教育相談の折から「できるだけ多くの時間を原学級で学習させたい」と強く希望されていたことが分かってきました。入学前からの保護者の願いも大切にしていきたいと思います。

そこで，原学級での生活を想定し，ナツコさんの実態を見返しながら必要と思われる支援にかかわることを中心に「実態把握と考察」のシート（※１）に整理しました。

実態把握と考察　（抜粋）

児童氏名	ナツコ（小1年　男・(女)）	記入氏名	○○　○○　平成19年5月

生育歴　家庭環境（担任記入）

・父・母・妹・祖父・本人の５人家族
・母親は○○の親の会に属し，年数回会に参加している。
・宿題も家庭でよく見てくれている。
・母親は，本児の教育に大変熱心である。

保護者の意向（担任記入）

・できるだけ原学級で友だちと関わりながら，生活をさせたい。

日常生活の姿（担任記入）

＜教科＞
・ひらがなはほとんど読むことができる。
・指差しで数が数えられるようになってきている。
・国語の教科書は，皆と一緒に声を出して読める部分もある。

＜行動＞
・慣れない場所では，自分の居場所がわからなくなってしまうことがある。

＜コミュニケーション＞
・人懐っこく誰とでもすぐ話せる。

＜対人関係＞

※１　自律教育シリーズ第１集P26～P27･P68 参照

STEP2 目標設定　～両担任間およびコーディネーターとの共通理解～

実態把握を進めるとともに，校長先生や教頭先生，特別支援教育コーディネーターの助言を得ながら，個別の指導計画（短期）（※２）の作成を進めます。ナツコさんが原学級での活動がしやすくなるよう，活動の場面ごとに支援のねらいや方法，支援者等についてまとめていきます。母親からも週に数時間，支援に入りたいという希望もあったので，計画案に盛り込みました。

個別の指導計画（短期）　（抜粋）

児童氏名　ナツコ　（小1年　男　㊛）　記入者氏名　○○　○○　平成19年5月～7月				
観　点	ね　ら　い	方　法	形 態	評 価
教　科	【全体】 ・原学級の友だちと関わりながら楽しく学習する。 【国語】 ・ひらがなを書けるようになる。 【算数】 ・５の合成・分解を理解する。 ・足し算や引き算の概念を理解し，ひとケタの基本的な計算ができるようになる。	・できるだけ友だちと関われるような学習内容や発問を工夫する。 ・困っているときには，友だちが手助けする雰囲気を作る。 ・母親の希望により，週２時間ほど母親に個別支援に入ってもらう。 ・週数時間程度を目安に，チームティーチング（原学級担任と支援員など）の体制をとる。 ・ひらがな学習では，なぞり書きを行う。 ・一斉の指示が分からないときには，個別に話したり，指差しなどをしたりして理解できるようにする。 ・具体物の利用やスモールステップ，繰り返しの学習を導入する。また，家庭学習での支援もお願する。	・原学級担任 ・支援員 ・母親 ・支援員，原学級担任など	

STEP3 支援の広がり　～校内委員会での検討～そして全校での支援へ～

原学級での授業実施にあたっては特別支援学級担任による支援だけでは難しい部分がありました。ナツコさんへの支援については全校の先生方に理解してもらう必要があります。早速校内委員会で検討してもらいました。

校内委員会では，支援ニーズがある数名の児童について検討しています。短時間で何人もの児童について検討していかなければなりません。ナツコさんについては，次の２点について絞って話し合いを進めました。

①本児の様子をもとに保護者の意向（ほとんどの時間を原学級で生活すること）をどの程度取り入れて支援していくか。
②限られた人的な資源を有効に使うために，だれが何時間，どのような支援をするか。

※２　自律教育シリーズ第１集P28～P29･P69 参照

検討の結果，友だちとのかかわりを楽しみにしているナツコさんの様子や原学級の子ども達のナツコさんの障害への理解なども考え，入学間もないこの時期は，保護者の意向も大切にしながら原学級での生活を支援していくことになりました。また，他の児童に比べ「支援の必要度」が高いことから，支援員が週数時間学級内で個別支援に入るよう計画しました。母親からも支援に入りたいという意向があったので，可能なときは来校してもらうように依頼することにしました。

これらの支援体制や支援の方向について，職員会議で特別支援教育コーディネーターから示され，全校職員の共通理解が図られるとともに，支援の体制を整えながら，「個別の指導計画」に沿った支援ができるようになりました。

コラム　支援の必要度

・　校内委員会では，支援ニーズのある児童について支援の必要度を検討し，支援にあたる職員がどのように支援にあたるかを協議しています。

※支援の必要度（各項目５段階で点数化し，必要度を算出）

観点別の項目

（１）特別な教材の準備の必要性
（２）担任以外の人的必要性
（３）教室以外の場所の必要性
（４）担任の意向

STEP4 支援の実際

５月中旬，「個別の指導計画」をもとに，学校での支援体制や具体的な支援内容について母親と確認しました。母親も安心したようでした。そして，ナツコさんへそれぞれの立場から支援が始まりました。

日常生活（原学級中心） → **原学級の担任を中心に,特別支援学級担任,支援員（母親）**

＜伸びたことやできるようになってきたことなど＞
①登下校は入学当初,母親同伴でしたが,部分的に友だちと登下校できるようになってきました。
②授業や給食の準備などが,少しずつ自分からできるようになってきました。
③休み時間には,上級生に遊んでもらうなどして,友だちや上級生との関わりが増えてきました。

各教科等（原学級中心） → **原学級の担任,特別支援学級担任や支援員（算数や国語の時間の一部をT.Tで）,（母親）**

①国語のひらがな学習では,下書きをなぞり,マスに文字が少しずつ書けるようになってきました。
②算数では,数の合成学習で「合体」という言葉を使うことで,数を合わせることがわかり始めてきました。

生活単元学習等（特別支援学級） → **特別支援学級担任　（1日1時間程度）**

①遊びや体育的なゲーム活動を通して,楽しく仲間と関わることができてきました。
②学級園での畑作業を通して,自然との関わりを持つことができました。
③販売活動に向けて,お菓子を楽しそうに作ることかできるようになってきました。

１学期末，母親と原学級の担任，特別支援学級の担任でこれからの支援の方向を話し合い，２学期からは，ナツコさんの実態に合わせ，算数の学習は特別支援学級で行うことになりました。

今後は，利用している地域の支援センターの方にも授業を参観してもらうなどして連携を取りながら，チームで協力して「個別の教育支援計画」を策定し，ナツコさんの将来を見据えたよりよい支援の方向をさぐっていきたいと考えています。

お母さん

今日は，算数の授業を参観させていただきました。先生から「原学級の内容で算数の授業を受けるのは，ナツコさんにとって大変なところもありますね」と言われました。ナツコの授業中の姿や家での宿題の様子から，私もそう感じていました。

親子レクのまとめの会でナツコは，「特別支援学級で遊んだことが一番楽しかった」と言っていました。この言葉が全てだと思いました。ナツコの気持ちを大切にして学習の場を考えたいです。　（参観日後の連絡帳より）

キーポイント

新１年生の保護者の中には，特別支援教育に大きな不安を抱えている方もいます。そのような場合，「個別の教育支援計画」や「個別の指導計画」を示し，それぞれの願いを形にしながら子どもの実態やニーズについて共通理解していくことで，その不安を取り除くことにつながります。

保護者や担任の願いのみを優先させるのではなく，いつも主役は子どもだということを念頭に置いて，支援の方向や方法を考えていきたいものです。

事例 2 安心して支援にあたれるようになりました

個別の教育支援計画を使って，特別支援学校と連携して

小学校通常の学級　2年（女子）

特別支援学校に短期間転校して機能訓練を受けることのあるリョウコさんは，通常の学級に在籍しています。2年生になり，特別支援教育支援員のクボタ先生にも支援していただけることになりました。学習内容が増え，画数の多い漢字を書くことも増えました。リョウコさんは，手指を必死に使い，時間がかかっても友だちと同じ回数書いて練習します。担任とクボタ先生は，「これからもっと画数の多い漢字が増えてくる」「トイレの支援が困った」「どう支援すればいいのだろう」と支援の方法で悩みを抱えていました。

一方，母親は，医療福祉センターの理学療法士に言われたことが，気になっていました。

STEP1 支援のスタート

それぞれの不安

障害のある子どもを支援することが初めてのクボタ先生。どう支援したらよいのかという悩みに加え，リョウコさんを抱えて３階の教室までの上り下りや，車いす押しなど肉体的な疲労も蓄積していました。

意見交換をする中で，将来への願いにそれぞれ違いがありました。私たちは，リョウコさんへの願いを共通理解して支援を進めることの必要性を確認し合いました。

できることから始めよう

特別支援教育コーディネーターのオカダ先生は，まず次の二つのことに取り組みました。

1　クボタ先生の研修のための連絡・調整

近くの特別支援学校でトイレ支援の参観
支援で困っていることについての相談

2　転校先の特別支援学校との連絡

転校している期間の生活の様子
支援の方法・方向のアドバイス

近くの特別支援学校の先生

転校先の特別支援学校の先生

その後，校内委員会を開き，校内で協力できることがないか話し合いました。

特別支援教育
コーディネーター

「個別の教育支援計画（案）」をみんなでつくりながら，情報を共有し，願いを明確にして，それぞれの役割や支援の方法を分かりやすくしよう。

個別の教育支援計画の策定にあたり，まず，支援する人たちが把握しているリョウコさんの実態を出し合って共通理解することにしました。どんな視点で実態をまとめたらよいか「実態の共通理解シート」（※）をもとに，支援にかかわる人たちで項目を取捨選択して書き，まとめました。

※　P7，70「実態の共通理解シート」参照

平成19年度　　実態の共通理解シート（抜粋）

特徴的な様子			
No.	項　　目		内　　容
1	【必須項目】 興味・関心，得意なこと，趣味		・色塗りに長い時間取り組む。パソコンでインターネットを見たり，キーボードを押して文字を書いたりすることを楽しみにしている。 ・マット・水泳は特に好き。
2	苦手なこと		・近くで大きな声を出されると嫌な顔をする。
③	学習状況	A 学習	3 知的には大きな遅れはないが，書字に時間がかかるため，ペースはゆっくり。 ・宿題を夕食までに終わらせる。計算問題，特に筆算は得意。 ・読みはほぼできるが，漢字の画数が多くなるほど書くことに時間がかかるため，作文を書くときには十分時間が必要。
4	感覚，知覚，認知		
5	諸検査		
6	性教育		
7			
8	行動の特性	B 行動	11 失敗すると固まる傾向がある。苦手なこと，お願いしたいことを自分から言葉で伝えることは少ない。近くにいる人の声がけが必要。 9 排泄の失敗を気にするようになってきた。 12 慣れた人であれば聞かれたことに対して応答できるが，慣れない人とは会話が成立しにくい。 13 声をよくかけてくれる友だちがいる。遊びに誘ってくれるが，移動に時間がかかるため，休み時間は教室での会話，廊下での散歩程度のかかわり。
⑨	友だちとの比較，失敗場面の行動		
10	パニックの状況		
⑪	コミュニケーション，要求の伝え方		
⑫	対人関係		
⑬	よく遊ぶ友だち，友だち関係		
14			

これからどの点を支援していけるとよいか，それぞれの願いを出し合いました。

保護者の願い
自分でできることはやらせたい。体育や校外に出る活動では個別の活動内容をお願いしたい。

担任の願い
リョウコさんの今もっている力を生かした指導の方法を考えたい。

クボタ先生の願い
本人の自立につなげるために，どこまで支援したらよいか明確にして支援をしたい。

把握した実態を共通理解しながら，リョウコさんへの支援の目標を決めました。

リョウコさんへの支援の目標
◎一人でできることは自分でやろうとする。自信を持ってできることが増える。
・自分なりにやりやすい方法を身につけて，主体的に文字を書いたり計算したりする。

STEP2 目標設定　～それぞれのできることを共通理解して～

支援の目標をもとにして，それぞれの場でできることを出し合いました。そして，それぞれの支援の内容を個別の教育支援計画に書きまとめ，それをそれぞれの場で取り組むことを確認し，支援が始まりました。

家庭での支援
・ご飯の盛りつけなど食事準備を手伝う機会を増やす。
・パソコンをいつでも使えるようにしておく。

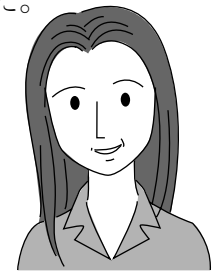
学級での支援
・連絡帳は，簡略化して書き写すようにする。
・パソコンを使って作文する機会を設ける。
・定時排泄を行うとともに，便座を改良し，一人で排泄できるようにする。

学校全体としての支援
・頑張っている姿を認め，励ます。
・廊下を使って歩行練習のできる場所を設ける。
・基本的にできそうなことはまず本人に任せ，近くで見守るようにする。

STEP3 支援の広がり　～転校先特別支援学校との連携～

私たちの支援について，さらに専門的な意見をいただきたいと考え，転校先の特別支援学校の先生に来校していただきました。リョウコさんの生活の様子と支援を見ていただきました。

自分から主体的にかかわりながら生活しています。いろいろ先生や友だちに声をかけられても，ゆっくりでもちゃんと答えていた姿が印象的でした。それを待ってあげられる余裕が大切ですね。だんだん話すことの抵抗感が少なくなってきているように感じます。



転校先の特別支援学校の先生

この時，次に身体機能訓練で特別支援学校へ短期転校したとき，個別の教育支援計画をもとにして支援していただくことも共通理解しました。

STEP4 支援の実際

学校では，教科学習を進める中で，特別支援学級の先生のアドバイスももらいながら文字を書く支援や身体機能にかかわる支援を重点に取り組みました。

また，一人でできることはリョウコさんに任せて待つという支援の方向を校内全員の先生で共通理解しました。

リョウコさんは，いろいろなところで多くの先生にかかわってもらっています。以前にも増して多くの笑顔が見られるようになりました。そしてまた，「私がやるよ」と自分から意欲的に活動する姿も増えています。

ある日のリョウコさん

運動会の練習を終えたリョウコさん。「あー疲れた。教室までだっこして行ってください」と，クボタ先生にお願いします。「そうだね。一生懸命練習したから疲れたね。きっとリョウコさんの友だちもみんな疲れているんじゃないかな」と声をかけました。すると，リョウコさんは自分で階段を上り始めました。通りかかった先生や友だちが励ましの声をかけてくれます。3階まで自分で上ることができました。

以来，自分で階段を上る姿が増えました。

上りきった後のリョウコさんは，汗をふきながら微笑んでいました。

今後に向けて

校内でどの程度身体機能訓練の要素を採り入れ，活動をどう行っていくのか，個別に対応する時間や活動をどのように位置づけることができるのかが課題として残っています。転校先の特別支援学校でのリョウコさんの生活の様子を参観し，今後，どういう視点で支援していくことが，リョウコさんの自立につながり，かかわる人たちが支援しやすくなるのかを考えたいと思っています。

これからも特別支援学校と連携し，個別の教育支援計画をどのように修正していくのか検討していきます。

キーポイント

障害のある児童生徒をどう支援をしたらよいか迷うことはないでしょうか。特に，初めて障害のある児童生徒にかかわる人にとって，不安は大きいと思います。その時，かかわる人たちで「個別の教育支援計画」を作成し，その子の実態やそれぞれの願いから将来に向けての支援を共通理解していくことにより，何をどのように支援していったらよいかが明確になり，安心して支援できるようになります。支援する人が同じようにかかわってくれることにより，児童生徒も安心感をおぼえ，自信をつけていくことにつながります。

また，特別支援学校・医療機関などへと連携を広げ，専門的な立場から支援の方法についてアドバイスをいただくことにより，支援のポイントやその意味が明確になります。

事例 3

生活全体に支援の輪を広げて

学校と家庭の連携の上に立ち，放課後の生活の充実を求めて

小学校特別支援学級　2年（男子）

1年生のときは通常の学級で学習していましたが,次第に学習の理解が難しくなり,生活上のトラブルも増えてきたマサオさん。「友だちと一緒に」と願ってきた母親でしたが,学級担任や特別支援教育コーディネーターなどと相談を繰り返す中で,特別支援学級に入級することになりました。

2年生に進級した4月,特別支援学級での学習が始まりました。家庭と学校,そしてマサオさんが毎日放課後過ごしている児童センターとが連携して支援をしていきました。

STEP1 支援のスタート　～マサオさんってどんな子?～

マサオさんは，学習への集中や理解，対人関係に困難があるものの，基本的な生活習慣等は身についており，原学級の友だちと一緒に遊んだり生活したりすることが大好きです。そこで，日常的には原学級で生活し，国語と算数の時間を中心に特別支援学級で学習することになりました。

４月になり，特別支援学級の担任も原学級の担任も新しくなったため，まずは連絡カードを使ったり休み時間等に情報交換をしたりして，マサオさんの得意なことや課題となることなどを一緒に探っていくことにしました。

特別支援学級での様子

・計算練習や漢字の書き取りが得意で，どんどん自分で進めていく。新しい漢字も比較的早く覚えることができる。
・「いつ？」「どこで？」「だれが？」などの質問に答えることが難しい。
・友だちがやっていることに目がいきがちで，自分の課題に集中できないことがある。

原学級での様子

・休み時間になると友だちと一緒に校庭に飛び出していき，走り回ったり鬼ごっこをしたりしている。ルールが分からなくてトラブルになることがある。
・指示の内容が理解できていないときがあるが，友だちの様子を見て同じように行動している。
・どんな学習でも，積極的に手を挙げて発言するが，質問の意図からずれた発言が多い。

STEP2 目標設定　～家庭訪問で共通理解を図って～

４月下旬に家庭訪問をしました。特別支援学級担任は原学級担任より一足先に訪問し，母親からマサオさんの様子について詳しくお聞きしました。

・家に帰ってくると，一人でミニカーを並べて遊んでいることが多い。
・家に帰ってきても遊ぶ相手がいないので，放課後は児童センターに行って勉強したり遊んだりしている。
・自分でみそ汁を作ろうとしたり，洗濯をしようとしたり，いろいろなことを試している。
・何かトラブルがあったときに言葉で伝えることができず，聞かれたことに答えることは難しい。しっかり会話ができるようになってほしい。

原学級担任も加わり，原学級での生活も含め，家庭と学校での支援の方向を確認することができました。

マサオさんへの願い
●できること，理解できることを増やし，見通しをもって行動できるようになってほしい。
●友だちと楽しく上手にかかわれるようになってほしい。

家庭での支援

・やりたいという気持ちを大切に，お手伝いや調理など，生活力をつける活動にたくさん取り組めるようにしていく。
・家族で楽しい経験や会話を多くする。

特別支援学級での支援

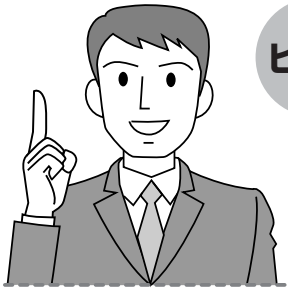
・簡単な文章の読み取りや，抽象的な言葉の理解の学習を進める。５Ｗ１Ｈを意識して文章を書けるようにしていく。(国語)
・計算のしかたを身につけるだけでなく，どういうときにその計算を使うのか，実際的な学習をする。(算数)
・少人数の中で，ソーシャルスキルトレーニングを積む。

原学級での支援

・得意な活動を学級の中に位置づけ，頑張っているところを認める。
・少人数でのグループ活動を大事にし，活動しにくそうなときには教師や友だちがモデルを示す。

母親の話から，毎日，放課後の2時間以上を過ごす児童センターでの生活が，マサオさんの生活の中で大きな位置を占めていることが分かってきました。宿題をやったり楽しく遊んだりしているようですが，１年生のときはトラブルが多く，いじめられたこともあったそうです。それでも，母親には友だち関係をつくるのが苦手だからこそ，多くの友だちと楽しく過ごす機会のある児童センターでの生活を大切にしたいという思いがありました。

そこで，児童センターでもマサオさんのニーズに応じた支援をしていただくように連携を進めることになりました。



ヒント

◆ここで話されたことを「誰と連携して支援するか」という視点で整理し，横のつながりとしてまとめると…

「個別の教育支援計画」

ここで話されたことから，学校で行う支援を，より具体的に表していくと…

「個別の指導計画」

こう考えると簡単！

STEP3 支援の広がり　～児童センターとの連携を～

特別支援学級担任が，母親と学校とで話した内容を「個別の教育支援計画（案）」としてまとめ，児童センターに出向きました。

センター長や職員の方からいろいろな話をお聞きする中で，マサオさんの障害についての情報が少なく，理解が十分ではなかったため，どう対応していいか悩んでいたことも分かってきました。

最近は，少し複雑なルールのある遊びが始まるとその場を離れて別の遊びに移っていったり，一人で静かに本を読んだりしていることが増えてきているということでした。

せっかく友だちとたくさん遊べる児童センターに来ているのだから，友だちと遊ぶ楽しさを十分に味わえるようにしてあげたい，じょうずなかかわり方を教えてあげたいという職員の方々の願いも語られました。

児童センターでの支援の方向が明確になったところで，個別の教育支援計画を作成しました。

平成19年度　個別の教育支援計画

記入者名：○○　○○　　記入日：平成19年6月○日

A市立B小学校　C学級		校長名	長野　県太	担任名	信濃　国子
氏名（ふりがな）	○○　マサオ　（男）		生年月日：平成　年　月　日		
保護者名		電話 緊急連絡先			
住所：					

将来に向けての願い（◎），現在の生活の願い（・）			
本人の願い	・友だちと仲良く勉強したり遊んだりしたい。 ・漢字や計算ができるようになりたい。	保護者の願い	◎コミュニケーション力が育ち，上手に対人関係をもてるようになってほしい。

支援目標（長期：◎，短期：・）
◎スムーズに対人関係をもてるようにする。 ◎分かること，できることを増やす。

主な支援内容			支援者
学校	学級	・国語学習の中で語いを増やし，言葉の使い方を学習する。算数では，実際的な場面の中で計算したり計測したりする学習を積む。 ・具体的な場面の中で，適切な行動の仕方を教える(声の大きさ，話し方など)。 ・少人数でのルールのあるゲーム，運動の中で，教師も一緒に運動しながら，ルールや動き方を繰り返し，具体的に指導する。	特別支援学級担任
学校	校内	・初めての活動，新しい活動については，安心して取り組めるように教師や周りの友だちが手順や方法を詳しく説明して一緒に取り組む。 ・得意な活動，好きな活動を学級の係や当番活動の中に位置づけ，がんばっている姿が周りから認められるようにする。	原学級担任
家庭		・本人の意欲を大切にしながら，実生活に役立つ力を身につけられるように，お手伝い，自分の身の回りのことなどに取り組ませる。 ・家族でたくさん楽しんだり話したりして，生活経験を広げ，言葉の世界を広げていく。	父　母　祖母
児童センター		・友だちとのかかわりを育てられるような活動内容を用意する。 ・トラブルになりそうなときには，職員が仲立ちに入り，何が問題なのか，具体的に話して伝える。	児童センター TEL
学習塾		（次回支援会議後　記入予定）	○○塾　○○先生 TEL
医療・福祉			

支援会議の記録		
《日時》 4月○日 14：30～15：30	《参加者》 母　特別支援学級担任 原学級担任	《協議内容・引き継ぎ事項等》 実態や課題の共通理解　　支援目標や支援の内容確認 支援計画（案）検討
5月○日 14：00～15：00	特別支援学級担任 児童センター職員	児童センターでの様子，課題，支援の方向 次回支援会議予定　　１９年８月

支援内容の評価

STEP4 支援の実際

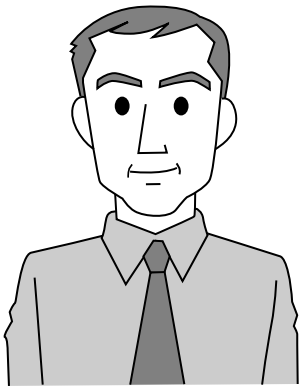
それぞれの立場からマサオさんへの支援が始まりました。

学校では，個別の指導計画に基づき，原学級と連携しながら指導を進めています。児童センターでも，マサオさんの遊びの様子をさりげなく見ていて友だちとの仲立ちをしたり，トラブルになる前に他の遊びに誘ったりしています。また，すごろく，トランプなど，マサオさんが大好きな少人数での遊びを取り入れて，一緒に遊べるように配慮してくれています。

母親はもちろん，児童センターの方にも時々学校での様子を見に来ていただいています。

大勢の中では落ち着いて学習することが難しいのですが，少人数の中で落ち着いて学習しているので安心しました。原学級でも児童センターでも大きなトラブルなく楽しく生活しているのを見るとうれしくなります。

お母さん



児童センター所長さん

今日は，センターでもできそうなことがないか，学校での様子を見にきてみました。

ほかのお子さんにも，こんなふうに協力して支援していきたいですね。

その後，少しでも基礎学力の定着を図りたいという母親の願いから，マサオさんは近所の学習塾に通うようになりました。ドリル的な学習の得意なマサオさんは，喜んで塾の学習に取り組んでいます。マサオさんの学習の仕方を伝えたり，取り組んでもらえそうなことを確認したりして，学習塾の先生との連携も図っていきたいと考えています。

キーポイント

特別支援学級の子どもの場合，まずは「個別の指導計画」を作ることが担任の仕事です。

その子の実態や課題を見据え，どのような学習内容を組み，どのような手だてで指導をしていくかの計画を立てることが支援の第一歩です。

ただ，その子の育ちやより充実した生活を願ったときには，担任だけががんばってもうまくいきません。原学級の担任，教科担任，保護者など，それぞれがそれぞれの立場から支援をしていくことが必要です。場合によっては，児童館，福祉施設など，学校以外の人や機関との連携が必要になってくることもあります。

その子の目標を達成するために，誰がどうやって支援するか，横の連携に視点を当てたものが「個別の教育支援計画」です。無理に支援者を探して計画を立てる必要はありません。今できることから少しずつふくらませていきましょう。

事例 4

成長を支えるみんなのアイディア

支援目標を明らかにして一貫した支援を

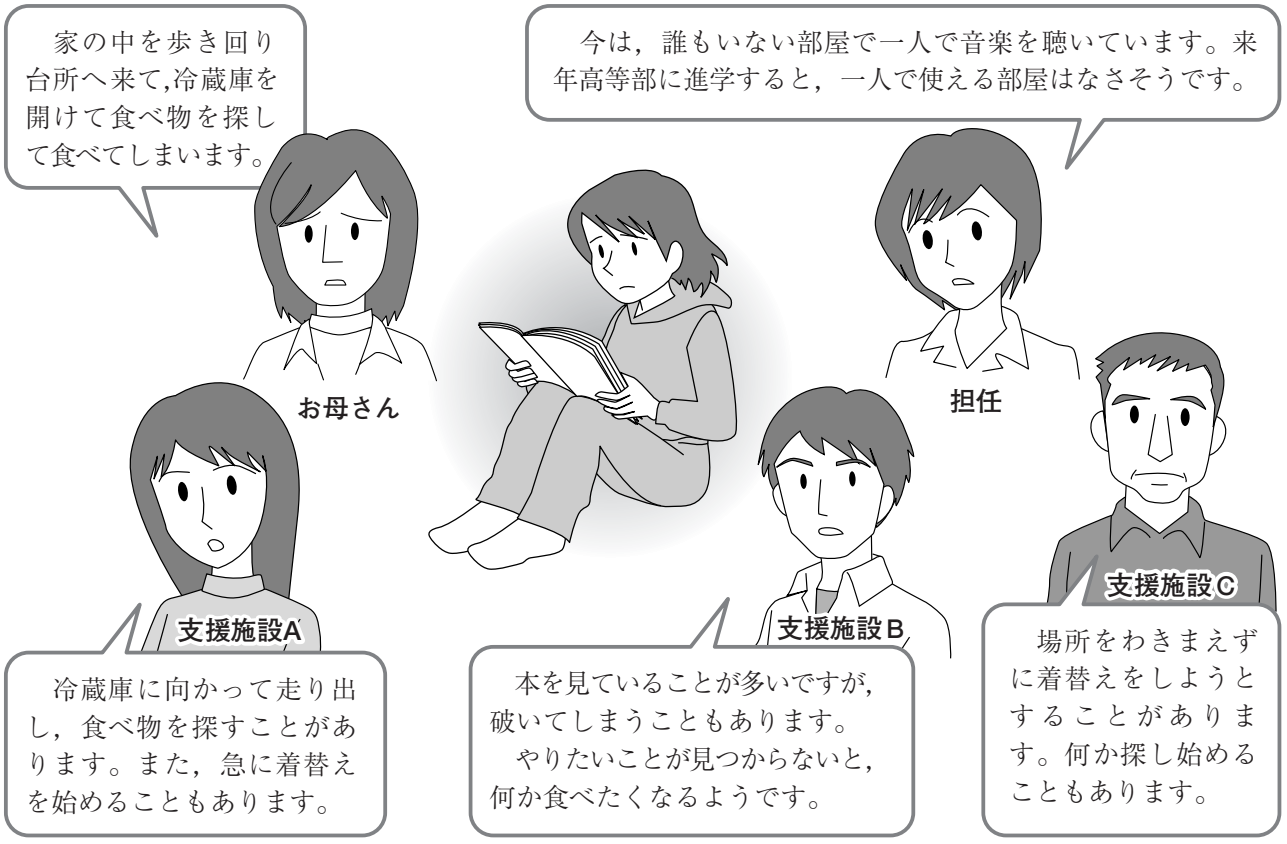
特別支援学校　中学部3年（女子）

スミ子さんは音楽を聴くことが大好きです。学校では休み時間や活動の合間に音楽を聴いてリラックスしていますが,校内を歩き回って他の教室のCDや本を持ち出そうとすることもあります。放課後や休日に利用している支援施設や家庭でも学校と同様な行動の他,ビデオを見る,急に着替えを始める,食べ物に執着するなどの姿が見られます。

高等部進学を一年後に控えて,将来の自立に向け学校,家庭,各支援施設が支援目標を共有し,同じ歩調で支援をしていこうと,支援会議を行うことになりました。

STEP1 支援のスタート　～それぞれの場での姿を情報交換して～

支援会議の前に担任が各支援施設を訪問し，スミ子さんの放課後の過ごし方の様子を参観し，様子を伝え合いました。



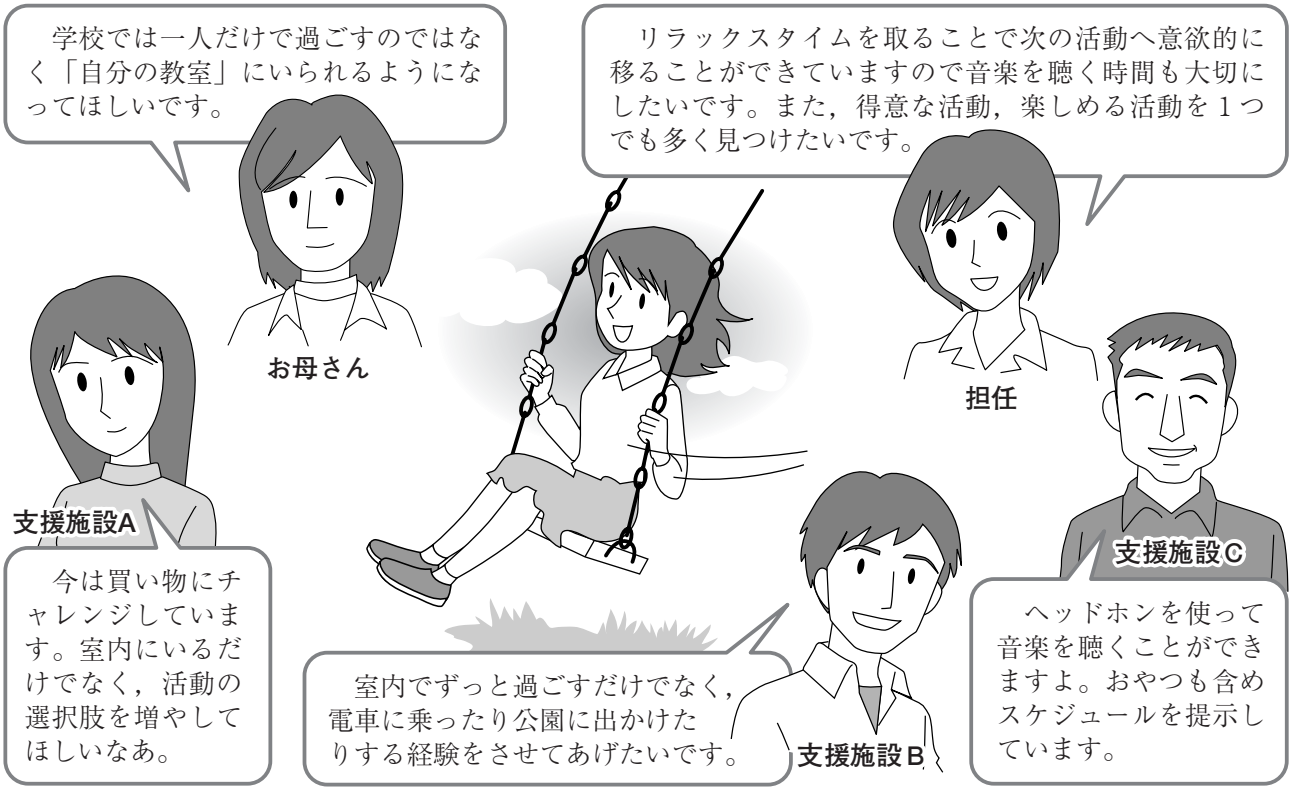
＜支援会議で話し合う課題を検討しました＞

各機関を訪問した結果，スミ子さんは，どの施設でも音楽を聴いて過ごすことが多いことが分かりました。また，やることがないときは，部屋の中を歩き回って何かを探すようなことも多く見られるようでした。

そこで，家庭・施設・学校でのスミ子さんの情報を共有し，その特徴的な行動からスミ子さんの願いや気持ちをとらえ直すことによって，スミ子さんのニーズに寄せた課題について支援会議で検討することが大切と考え，それぞれの支援施設と連絡を取りました。

STEP2 目標設定　～関係者が願いを共有して～

家庭，学校，各支援施設より関係者が集まり支援会議を行いました。



関係者が共有したスミ子さんの思い

安心して一人でゆっくりしたいなあ，そのための場所や時間もほしいなあ。

音楽を聴いたりビデオを見たりするだけでなく，私の楽しめることないかなあ。

会議で確認された共通のねがい

スミ子さんが落ち着ける環境を整えましょう。

取り組める活動を増やしてあげたいなあ。

支援の方向

落ち着いて過ごすことのできる学校，家庭，施設で
スミ子さんの楽しめることを増やしましょう

学校では→
- 自分の教室内に居場所をつくる。お気に入りの長座布団を敷く。
- ヘッドホンを使って音楽を聴けるようにする（教室内でも他の生徒への影響はなさそう）。
- 年間通して個別学習や作業学習に得意な活動を取り入れる。

家庭では→
- 適当な広さの「スミ子スペース」をつくる。

支援施設では→
- 買い物や公園に出かけるなど外に出る経験を積み，「やりたいこと」の選択肢が増えるようにする。
- 次の行動に移るときや，していいこと，いけないことについて伝えるときには絵カード，写真カードなどを使用する。

STEP3 支援の広がり　～支援の役割分担～

学校，家庭，各支援施設，それぞれができることをシートに記入し，個別の教育支援計画を作りました。

平成19年度　個別の教育支援計画シート

初回記入者名：○○ ○○　　初回記入日：平成 １９ 年 ５ 月 ○ 日

○○　養護学校　中学部　年		校長名		担任名	
氏（ふりがな）名	○○　スミ子（女）		生年月日：平成　年　月　日		
保護者名		電話 緊急連絡先			
住所：　〒					

将来に向けての願い（◎），現在の生活の願い（・）			
本人の願い	・ゆっくり過ごせる場所で，自分のペースを大切にしながら活動したい。	保護者の願い	・高等部進学，さらに卒業後落ち着いて安心して移行していけるように準備したい。

支援目標（長期：◎，短期：・）

◎一人で活動できたり，自分で行動に移れたりする場面が増える。
・楽しめること，できることを増やす。
・外へでかけるなどの経験を増やし，充実した時間を過ごせるようにする。

	主な支援内容	支援者
学校	自分の教室内での居場所づくり。音楽をヘッドホンで聴くように声がけする。 タイマーを活用し次の活動へ移るきっかけにする。 得意なこと，好きなことを生かしながら活動の幅を広げる。	担任 学校職員
家庭	家の中にこもりきりにならないように，買い物や散歩などに一緒に行く。 家の中に専用のスペース（広すぎないように）を設置し，一人でリラックスできる場所にする。	家族
支援施設Ａ	買い物学習や外出などの経験を増やす。写真カードを提示して誘う。 やりたいことを自分で選べるよう経験を重ね，好きな活動を見つける。 苦手なこと，嫌なことを理解し，不必要な混乱を招かないようにする。	支援員
支援施設Ｂ	室内で過ごすだけでなく外へ出るなど違う活動を見つける。 絵カードの活用をする。	支援員
支援施設Ｃ	買い物，バスに乗る経験をする。 おやつも含めスケジュールを決める。 どの支援員も同じ対応ができるように引き継ぎファイルや会議での確認を行う。	支援員

支援会議の記録

《日時》	《参加者》	《協議内容・引き継ぎ事項等》
１９年４月	母，担任，部長， 支援員Ａ，支援員Ｂ， 支援員Ｃ	実態の共有，今年度の支援目標や支援の内容確認 次回支援会議予定１９年１２月（高等部進学に向けての移行支援）

支援内容の評価

以上の内容を確認いたしました。　平成　年　月　日　保護者名＿＿＿＿＿＿＿＿

STEP4 支援の実際

支援会議で相談したことについて，さっそくそれぞれの関係者ができることからはじめました。

スミ子専用のスペースをつくりました。広すぎても落ち着かないので小さいタンスで仕切っています。安心してすごしているようです。

お母さん

音楽を聴いてばかりいるのではなく，最近は体育館のトランポリンをしたり，庭のブランコに乗ったりすることもあります。ちょっと活動的になったかなと思います。

教室内に座布団を敷いてスミ子さんの居場所を作りました。ヘッドホンを上手に使って音楽を聴いています。

担任

欲しいものが買えることの喜びが分かってきたようです。夏休み中「ドライブ！（に行きたい）」と伝えてくれました。

支援施設A

支援施設C

着替えの服を見えないところに置くようにしたところ，急に着替え始めることはなくなりました。一人で過ごせる部屋を確保しています。

おやつも含めスケジュールを提示することで，次の活動に移りやすくなったようです。

夏休み中に外出ができました。森の公園に行き，電車にも乗りました。いろいろな経験をしています。施設Aと同じように写真カードも使っています。

支援施設B

今後に向けて

スミ子さんが生活するそれぞれの場所で落ちつける環境をつくったことで，スミ子さんの活動の様子が変わってきました。大好きな音楽を一人で聴く時間も大切にしながら，体を動かしたり外出したりする楽しみも支援者と共に見つけ出してきているようです。

放課後の時間を過ごす支援施設からは，「その日の体調や学校での様子を知りたい」「もっとお互いのアイディアを取り入れ合いたい」との意見が出されています。今後，学校と家庭とで交わしている連絡ノートを「スミ子さんノート」として活用し，情報交換しようと考えています。

キーポイント

家庭，学校，支援施設などが集まって支援会議を開くことが難しい場合は，それぞれの支援者ができそうなことを確認し，シートに記入していく方法で「個別の教育支援計画」を策定します。

スミ子さんが徐々に落ち着いた生活になってきたのは，関係する支援者がスミ子さんの行動や生活の様子からスミ子さんの願いや気持ちを共通理解し，みんなが同じ方向で支援にあたったためです。

それぞれの支援者が把握している実態を出し合い，支援の具体について相談しながら，スミ子さんの支援目標の確認や役割分担をしていくことの大切さが分かりました。

事例 5

日々の「よくばりファイル」を活用した支援の連携

家庭・教科担任と，日々の姿を伝え合いながら連携して

中学校特別支援学級　2年（男子）

自分の気になることに夢中になりすぎたり,好きな人に対してこだわりをもって接したりするため,さまざまなトラブルを起こしがちだった中1のユウキさん。学校での環境を整えることで,少しずつ安定した学校生活を送れるようになってきましたが,さらに支援を進めるためには,学級担任,家庭,教科担任がユウキさんの実態や課題を共通理解し,連携して支援をしていくことが必要だと分かってきました。

ユウキさんの日々の姿の記録と連携した支援を行うために,毎日家庭とのやりとりに使っていた「連絡ファイル」を活用していくことにしました。

STEP1 支援のスタート　～実態の共通理解と願いの共有～

入学直後のユウキさんには，「気になる子につきまとう」「自分を注意する仲間に暴力をふるう」などの行動が見られました。友だちと仲良くしたいのにうまくいかないいらだちの様子も見られるようになってきました。本人だけでなく，家庭や学校の困り感も大きくなってきました。

保護者懇談や，小学校の時からお世話になっていた精神保健福祉センターの先生にも加わっていただいての支援会議を行う中で，友だちとうまくいかない背景には，入学直後の環境の大きな変化に対する不適応感や，自分をコントロールする力の弱さがあることが分かってきました。

「友だちと仲良く生活したい」というのが本人，そして，周りのみんなの願いです。その願いをかなえるために，まず，落ち着いて生活できるような環境を整え，自分の気持ちや行動を調節する力をつけていけるように支援をしていくことになりました。

STEP2 目標設定　～ふさわしい環境を用意して～

具体的な支援は，環境の構造化（活動の場所にふさわしい行動がとれるような支援）から始めました。

不要な視覚刺激の遮断のために，学習用のテーブルに置くミニ・ブースを用意しました。

イライラした時などに休める場所を確保するために，パーテーションを利用して憩いの小部屋を作り，自分で時間を決めて休むことができるようにしました。

また，言葉で注意されると，自分を否定されるようでカッとしてしまいがちなユウキさんに注意を促す時に提示する注意うちわを，用意しました。

環境の構造化をしたことで，ユウキさんの生活は少しずつ落ち着いてきました。

２年進級時には，３つの教育課題をすえ，個別の指導計画を作成しました。

ミニブース

注意うちわ

憩いの小部屋

《教育課題》　・自分の気持ちを見つめる目を育てる。
・教科学習で力をつけ，自分に自信をもつ。
・対人関係を改善する。

個別の指導計画（短期）　※1

生徒氏名　ユウキ　（中2年　男）　記入者氏名　T･T　平成19年6月～7月				
観　点	ね　ら　い	方　法	形　態	評　価
教　科	・漢字検定６級に合格できる。 ・方程式の基礎を理解する。	・過去問題を１日１枚はやり，点数を記録しつつ励みとする。間違えた漢字を練習する。 ・天秤ばかりを使い，つりあった状態が左辺・右辺の＝であるこ	・４名での少人数学習。 ・家庭学習。 ・別室での取り出し指導。	・１５０点以上とれるようになるとともに，間違えた字の練習もよくやった。本番でも１５７点をとり見事合格！ ・移項の理解もスムーズ
		中　略		
対人関係	・こだわっている自分に気づくことができ，気持ちを切り替えることができる。	・仲間や教師の注意を聞いたとき，人から少し離れて落ちついて考える時間をもつ。（小部屋の利用） ・自分を見つめ，上手に切り替えることができた事実を蓄積して自信がもてるようにする。	・穏やかな口調でユウキさんの今の姿を伝える。好きで心配だから注意するんだよという姿勢を大切にする。 ・仲間・教師	・注意された時に，自分なりの方法で，興奮したりこだわったりしている自分の姿に気づくことが増えてきた。自分の行動や言葉がどのように相手に伝わるかを考えようとする姿勢も見られる。

STEP3 支援の広がり　～日々の記録で家庭との連携　校内で連携～

個別の指導計画に沿った支援を行うには，各教科担任が連絡を取り合いながら同じ方針で支援にあたっていく必要があります。日々の記録を，簡単に確実に残したいと願い，「よくばりファイル」の活用を始めました。

１年の時から，家庭とは連絡帳を使って毎日連絡し合い，ユウキさんの体調や学習の様子，気持ちについて共通理解を図ってきました。その形式をもとに，次のような項目のシートを作ってファイルに綴じ込み，日々の記録の蓄積と，担任同士や学校と保護者の情報交換に使うことにしました。

① 朝食の様子や睡眠時間が確保されているかなどの健康状態の確認・母親からの情報
② 今日一日の日課の確認とその時間の様子の記録
③ 一日をふり返っての担任のコメント（可能なら写真なども貼り付ける）

さらに，ユウキさん本人が一日の目当てや反省を記入できるようにしました。ユウキさんは，朝，担任といっしょに一日の予定を確認し，目当てを記入します。そのシートを学習ブースの前面に掲示して，いつでも日課を確認できるようにしました。このことで，「よくばりファイル」が，ユウキさん本人が一日の生活に見通しをもったり，自分を振り返ったりするための大事な手立てになってきました。

また，シートを学習ブースに掲示することで，教科担任が授業での姿を必ずメモしてくれます。「よくばりファイル」は，学校における支援の連携も支えるものになりました。

※１　自律教育シリーズ第１集ｐ２８・２９参照

☆ ある日のよくばりファイル ☆

ユウキさんの一日　　6月○日（火）

①お家でのようす

よく眠れましたか？　寝た時刻（9:30）　起きた時刻（6:20）
よく眠れた　・　ふ つ う　・　眠れなかった

しっかり食べてきましたか？　卵スープ・ご飯・鶏肉・お野菜・牛乳
いっぱい食べた　・　ふ つ う　・　食べなかった

②今日の予定・一日のようす

今日のめあて　目標を見ながら，自分がどうしたいか考える

花丸	教　科	内容予定	コ　メ　ン　ト
	朝の活動	朝読書	
	1 国語	漢字検定に向け	６級の過去問題をやりました。150点を超えていて，本番が楽しみです。
	2 社会	世界の地理	各大陸の山脈や川を調べて，地図に書き込みました。集中できてＮ先生にもほめられました。
	3 生活	革細工の動物	革細工のパンダを作りました。後半は息抜きでパソコン。
	4 英語	lesson 2	絵を見て単語を書くドリルの後，文章を写し意味を考えました。しゃべれたり意味は分かっていても，スペルを間違えてしまうことがありました。ローマ字がしっかり使えることは大事ですね。
	給食	麦ご飯・大根味噌汁・焼き肉・ポテトサラダ	１年のヒロシくんが準備に手間取っているのを見て，どんどん手伝ってくれました。今日は５・６組そろって食べました。食事の後も楽しく過ごせました。
	5 数学	方程式の応用	方程式を解くのは上手になりましたので，応用に入りました。何をχとおき，何をｙとおくかに悩み，頭をひねっていました。

③課題にかかわって　今の自分の姿に気づける→いい自分に切り替えられる

こんな状況の時に	こんなことがあったら	こうなれた
い　つ　お昼休みに だれと　サユリさんとパソコンをしているとき どんなふうに　自分の調べたいＤＳのことに夢中になっていて，その周りでリョウさんがすることもなく困っていました。	だれが　担任が どんなことをどんなふうに 「ユウキくんは３時間目にパソコンやったよね…」 とささやいたら	「リョウちゃん，どうぞ。」と譲ってあげていました。その後は紙飛行機で遊んでいました。

④担任から

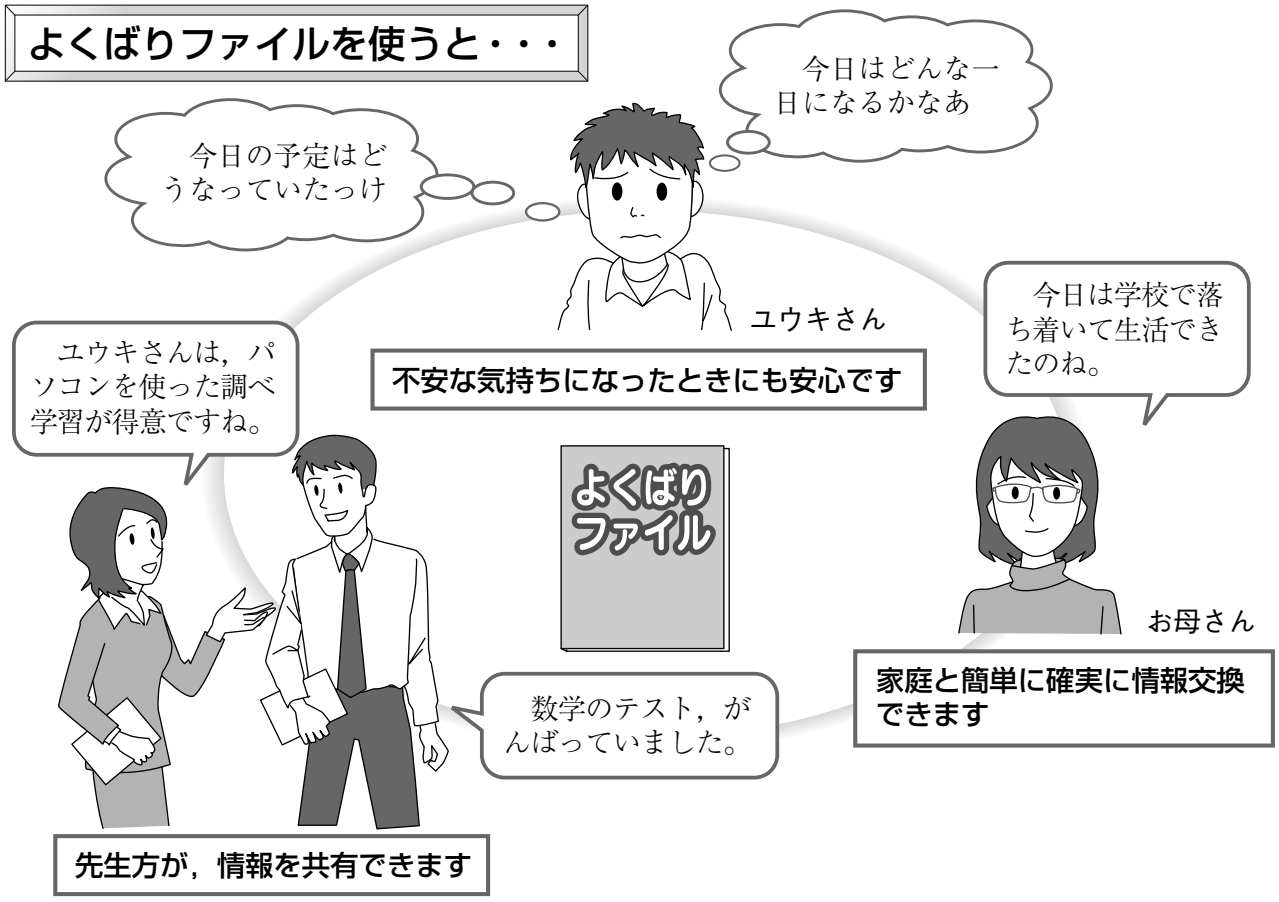
とても良い一日になりました。仲間にもしっとりと優しく，給食の準備や掃除も気を配ってすることができました。窓ふき掃除は，ガラスの上の方からとても丁寧にやっていてびっくりしました。

⑤ユウキさん　一日を振りかえって

今日も連続で良い一日になりました。今夜「ほっとホット学習会」（特別支援学校での学習会）でそういうことを色々（今まで良かったことを）言う予定です。

⑥お家から

学習会ではうれしい報告をしていました。思いやりの気持ちをもてるようになったことやバレーボールクラスマッチでサーブが打てるようになったことetc，です。　大人６名の参加でしたが，みなさんに「よかったね」といって喜んでもらい ました。ありがとうございます。１年前の学習会の頃のことを思いだし，本当にう れしいです。



今後に向けて　「よくばりファイル」を評価と支援の連携に生かす

学期末には「よくばりファイル」の記録を振り返りながら，教科担任者会で話題にしたり通知票の評価に生かしたりしました。そして教科学習の記録に残された成長の姿を，教科ごとの評価の観点に沿った見返しに生かし，次の指導の方向を見直すために使いました。

また，保護者には，主治医の先生の診察時に「よくばりファイル」を持参してもらい，今後の指導方法へのアドバイスをいただいたり，投薬量決定のための参考に活用したりしてもらいました。「よくばりファイル」が校外との連携にも使われるようにしています。

今後は，ユウキさんの卒業後の姿を見通しての支援が必要となってきます。「よくばりファイル」を蓄積することから，見つけ出されてきたユウキさんの姿や課題，支援の内容を分析・整理し，「個別の教育支援計画」としてまとめ，進学へとつなげていきたいと思います。

キーポイント

「友だちと仲良くしたい」「がんばった自分を評価してほしい」という気持ちの強いユウキさん。その願いを現実のものにするには，ユウキさんにかかわる人々が，その日その時に記録していく記入型シート（よくばりファイル）により，情報交換していくことが有効でした。そしてその記録は，医療や療育相談の際にも活用されました。

このように，横の連携を意識しながら積み重ねた記録は，Ｐ－Ｄ－Ｓサイクルの中で見直していくことで「個別の教育支援計画」のもとにもなっていきます。

事例 6

「記録シート」を活用した支援

それぞれ支援を分担して，情報交換を行いながら

小学校通常の学級　3・5年（兄弟）

昨年度まで学校を休みがちだったテツオさん,イサオさん兄弟が転入してきました。受け入れるにあたり,前籍校での生活の様子について情報を集めました。

新しい学校での生活に期待をふくらませて登校した兄弟。転校してすぐにクラスの友だちと元気に校庭で遊ぶ姿が見られました。しかし数日後,体調の不良を訴えて欠席し,休みが続きました。そこで,今後の学校生活や支援の方法について保護者と話し合うことにしました。

STEP1 支援のスタート　～支援の方法を見直そう～

兄弟は転入後数日しか登校していません。そこでわたしたちは，今の生活の様子やテツオさん，イサオさんの気持ちを知りたいと考え，母親に来校していただき，担任のタカハシ先生，校長，教頭，特別支援教育コーディネーターとで話し合う機会を設けました。兄弟は家で，「勉強が分からない」「行かなきゃいけないのは分かるんだけど，行けない」「みんなにどう思われているか不安」などと話していることが分かりました。

わたしたちは，保健室や特別支援学級など自分の生活リズムをつくりやすいところでの生活から始めてはどうかと提案し，見学を勧めました。また，昨年度お世話になっていたユモト先生が担当している他校の中間教室も紹介しました。兄弟が通いやすいところを選択して，まずはそこでの生活が定着してから，少しずつかかわりを広げる支援をしていこうと考えたからです。

STEP2 目標設定　～それぞれの願いや不安を共有することからはじめよう～

４月下旬，兄弟は，昨年度までお世話になったユモト先生が担当をしているという安心感から中間教室へ通級し始めました。ユモト先生は，「まだまだ，１日に数時間しか登校してないけれど，徐々に１日通して登校できるといいですね」と話してくれました。

かかわる人たちが，兄弟の思いやそれぞれの願いを共通理解し，情報交換をスムーズにしながらみんなで支援できないかと願い，保護者（両親）とユモト先生，タカハシ先生，特別支援教育コーディネーターとで支援会議を行いました。

保護者（家庭）
中間教室に通うようになって笑顔が増え，明るくなりました。
今の状況をまず維持したいです。

ユモト先生（中間教室）
昼過ぎまで居ることができるようになりました。通級している他の友だちといっしょに遊ぶのが楽しいようです。

タカハシ先生（学校）
数日だけの登校のため，担任との人間関係が築けておらず，どのようにかかわっていったらよいのか悩んでいます。

支援会議の中で，わたしたちは「学校に通えるように一歩一歩支援していこう」を願いとして共通理解し，それぞれの立場から支援を進めることにしました。

STEP3 支援の広がり　～それぞれの役割，できることは何だろうか～

生活の様子や願いについて支援会議で話し合う中で，それぞれの場でできることとできないことがあり，役割があることが見えてきました。そこで，どのような役割があるのか，どのような支援ができそうかを視点にして意見交換しました。

家　庭
○家庭でお手伝いを分担し，家族の一員としての自覚がもてるようにしたらどうか。
○スクールカウンセラーに母親が相談する機会を設けて，子育ての不安を聞いてもらってはどうか。

中間教室
○勉強に少しでも自信がもてるように，中間教室ではできる限り学習の機会を増やしていく。
○人とのかかわりをより多く体験できるような機会も増やしていく。

学　校
○タカハシ先生が中間教室を参観して，二人とのかかわりの機会を増やしていってはどうか。
○仲のよい友だちと連絡をとる機会，遊ぶ機会を設けて，交流を深める方法はないか。
○夏休みに学校を開放して，学校の様子を自然なかたちで感じられるようにしていってはどうか。

意見交換した内容から，まずこの時期の生活のリズムを整えることが大事であると考え，短期の目標を立てて支援することにしました。それぞれの支援が明確になるように，話し合われた内容を「個別の教育支援計画」にまとめて，それぞれで支援を始めました。

平成19年度　　テツオさんイサオさんの個別の教育支援計画シート（共通部分抜粋）

将来に向けての願い（◎），現在の生活の願い（・）			
本人の願い	友だちと遊びたい。 好きなことをいっぱいやりたい。	保護者の願い	学校へ通ってほしい。
支援目標（長期：◎，短期：・）			
・生活のリズムを整え，家族・学級の一員であるという自覚をもつ。 ・「できた」という経験を積みながら学習や活動に自信をもつ。			

主な支援内容			支援者
学校	学級	・学級通信，プリントなど学校学級での活動の様子がわかるものを家庭に直接届ける。 ・仲のよい友だちから電話や手紙を届けて遊ぶ機会を設けるようにはたらきかける。 ・中間教室のユモト先生との連絡を密にとり，登校日数，生活の様子について情報交換をする。	タカハシ先生
	校内	・学校が休日の時など他の児童がいない時を活用して兄弟に学校を開放する機会を設ける。	
家庭		・それぞれのできる活動を，自分の仕事（家庭内）として決め，役割を意識して取り組めるようにする。 ・一人でできたことや自分からやろうとしている姿をほめる，認める声がけをする。 ・生活リズムが乱れないよう，早寝早起きをはたらきかける。	父親 母親
中間教室		・ドリルを使って，自分がやりたい単元問題から算数に取り組んでいく。 ・一日一時間程度学習する時間を位置づける。 ・登校後，その日の活動計画を二人で話し合って決める。 ・活動後は必ず最後まで片づけをするよう習慣化を図る。	ユモト先生
地域		・母親の育児に関わるカウンセリングを行う。	スクール カウンセラー

支援を始めた当初，母親から，子どもたちの表情が明るくなり始めたこと，自分のやりたいことに熱中する姿が増えてきていることにうれしさを感じていると話していただきました。しかし，母親自

身に子どもへのかかわり方で不安があることを相談されました。

そこで，スクールカウンセラーと話す機会を設けました。スクールカウンセラーには，母親への支援をお願いするとともに，支援の輪に加わっていただくことになりました。

今は，無理をして家庭にいろいろお願いすることは避けたほうがよいのではないかと考えます。

スクールカウンセラー

STEP4 支援の実際　～それぞれで支援して,記録を残して,共通理解して～

家庭，中間教室，学校が役割分担し，懇談，電話やFAXで様子について連絡し合いながら支援を進めました。連絡し合った内容が，かかわる支援者で共有できるようにすれば，「それぞれの支援の様子やそれによってみられた子どもの姿の共通理解をさらにすすめられる」「支援会議で要点的に話し合える」と考え，情報交換したことを記録シートにしてまとめていきました。

記録シート（一部抜粋）

家　　庭	中間教室	学　　校
○／○（FAX→学校） 「明日はメンタルフレンドの先生が折り紙を教えてくれる日だから行くで」とうれしそうに話してくれました。 ○／○（FAX→学校） 昨日は折り鶴を折り，すごい鶴を折ることができました。二人とも真剣に折ったので夜は普段より寝付きがよく，ぐっすり寝て今朝は気分よく起きてきました。 ○／○（FAX→学校） クラスの友だちからのお手紙何度も読んでとてもうれしそうです。本当にありがとうございます。 ○／○（FAX→学校） イサオは土曜日から下痢していて今日はだいじょうぶそうですが，本人が休むと言っているので様子を見たいと思います。 ○／○（懇談より→学校） 地区のお祭りでクラスの子に会い，「テツオくん」と声をかけてくれました。4人の子が「学校で待っとるで」「何かあったら俺らが守るで」と声をかけてくれました。帰り道テツオが「うれしくて泣きそうになっちゃった。がんばりたいな」と言っていました。テツオの気持ちもクラスの子たちに伝えてもらえたらと思います。	○／○（活動報告書から→学校） 支援会議ご苦労様でした。夏休み中1日でも学校へ登校できたらと願っています。不登校の子どものカギを握っているのは学級担任の先生であり，周りがいかに支えるかが大切であると言われています。先日の話のように，家庭訪問の仕方を工夫していただければと思っています。夏休み中，中間教室にはいつ顔を出してもいいことにしてあります。 ○／○（活動報告書から→学校） ２学期がんばりたいことを書かせたところ二人に共通していることは，「できるだけたくさん友だちを作りたい」でした。休み中小学校へ行った以外，友だちとは遊んでいないようですが，何か思うところがあるのか。テツオくんが，「もっと勉強をたくさんやりたい」と言ってきました。実行がともなうように支援していきたい。	○／○（支援会議→家庭） 中間教室で活動する様子を参観したり，いっしょに活動できる機会を設けたりしていきたいと思います。また，つながりのできそうな友だちに遊びに誘うように働きかけたいと思います。また，夏休みを使って学校を開放したいと思っていますがどうでしょうか。 ○／○（家庭訪問→家庭） 夏休み中，友だちもいっしょに遊びたいと言っています。早速日程を組みたいと思います。 ○／○（家庭訪問→家庭） ２学期家庭訪問する回数を増やしたいと思います。学級活動の時間なども参加できればと思うので，運動会や遠足など機会を見てお誘いをしようと思います。クラスの友だちから手紙を届けるようにしたいと思います。

記録シート記入のポイント

・学校に寄せられた情報を学校(担当者)が，記録シートに整理します。
　（保護者←→学校，学校←→中間教室それぞれの情報交換，支援会議での話のポイント）
・日常的な些細なことも，子どもたちの生活や気持ちの変化が見られるものは記録します。
・記載に関しては，それぞれの承諾を得ます。誰が見てもいいように書く内容について配慮します。
・記録シートは，支援会議の場で配布します。子どもに大きな変化があったときなどは必要に応じてそれまで記録したものを交換します。
・電話やＦＡＸ，家庭訪問などでの情報交換をすすめながら，子どもたちの心の動きを読み取り，同一歩調で支援できるように支援の方法を確認しながら進めます。

兄弟の姿の変化

苦手意識のあった算数にも，自分ができそうなところから取り組んでいます。「できる」「もっとできるようになりたい」という気持ちを大事に育てていきたいと考えています。続けて休むことも少なくなっています。
（ユモト先生）

夜更かしもなく，生活のリズムはよいです。自分から起きてきて「今日，中間教室へ行く」と言うことが増えました。自分から「何か手伝おうか」「やってあげるよ」と言うこともあります。　最近では「小学校の友だちはどんな勉強しているのかな」と言っています。
（お母さん）

支　援　会　議

・連絡帳を届けに毎週担任が行くようにします。
・運動会があります。クラスの友だちからお誘いの手紙を送ります。

タカハシ先生

これまでのやりとりを記録シートにまとめて共通理解

運動会を見に行き「みんながんばっている姿が見られてうれしかった。来年は出たい」と言っています。確かに心に響いています。次につながっていくように感じます。

お母さん

学校から誘いを増やせそう。子どもに連絡帳を届けてもらうようにしよう。

運動が好きです。野球をやったり，鉄棒をしたりして体を動かすことには意欲的です。

ユモト先生

新たな支援の方向

○遠足や学級の行事，体育の時間をいっしょに活動しようと誘う。
（手段：手紙，母親へ電話，友だちからの連絡）
○校舎に入るのは抵抗がある。校舎外の活動を企画する。

情報交換した内容を記録シートで共通理解していくことにより，次にどのような行動や支援ができそうか考えやすくなりました。また，支援者みんなが同じ気持ちで支援にあたれるようになりました。

わたしたちは，支援会議や情報交換を重ねる中で，兄弟の育ちの姿から支援の目標を登校に視点を置くのでなく，**「将来の自立に向けて経験を積み，自分に自信を持てるようにする」**のように，長期目標として共通理解することができました。そして，兄弟の豊かな生活に向けて支援を始めています。今後，さらに記録シートを活用して子どもの姿を共通理解しながら支援していく方法を検討していきたいと考えています。

キーポイント

「個別の教育支援計画」は支援チームをつなぐツールです。また，それぞれの支援者が児童・生徒の実態や願いをもとに話し合い，支援の目標を設定することで，視点を明確にして支援にあたれるので子どもの育ちがはっきり見えます。

記録シートを活用して支援者みんなで情報交換をタイムリーに行うことは，有効にはたらいた支援や活動内容を他の場の支援にすぐに生かせます。支援会議を頻繁に行う必要もなくなり，二ヵ月に一度の支援会議でも要点的に話し合いができました。また，子どもがどのように変わってきているのか記録が残り，各々の支援を振り返ることもできます。

事例 7

子どもの願いを支えるために

学校・家庭・医療機関が連携して

中学校通常の学級　3年（女子）

ハルカさんは中学校3年生。中学1年の3学期に突然発病し,1年間の入院生活を余儀なくされました。入院中には大きな手術も経験し,投薬,リハビリなど厳しい治療に向かいながら,院内学級での学習も続けました。

2年生の後半で退院し,再び中学校での生活が始まりましたが,退院当初は1日2時間の授業が精一杯です。卒業後は地元の高校に進み,将来は医師になりたいという願いが強かったのですが,中学校生活は思っていたようには進まず,落ち込みがちな日々が続きました。

通院はまだまだ続きます。ハルカさんの学校生活を支えていくためには,学校と家庭と医療との一層の連携と支援が必要です。

STEP1 支援のスタート　～学校に復学し,新たに生まれた不安や困難～

ハルカさんの退院にあたり，生活に不都合が生じないよう，ハルカさん,保護者,医師,院内学級担任でカンファレンス（医療機関による打ち合わせ会）を実施していました。しかし実際に学校生活が始まると，この時のカンファレンスでは確認できなかった新たな不安が生じていました。

○ ハルカさんの悩みに気づいた担任の提案で,支援会議を行うことにしました。

STEP2 目標設定　～悩みや願いを共有化し,解決策を考え合う～

●このようなハルカさんに

あと1年の中学校生活。思うようには進まない学習や,生徒会の仕事の大変さ,疲れやすい体のため「病院生活の方がよかったかも…」と,落ち込みがちです。

●広く情報や支援アイディアを求めて

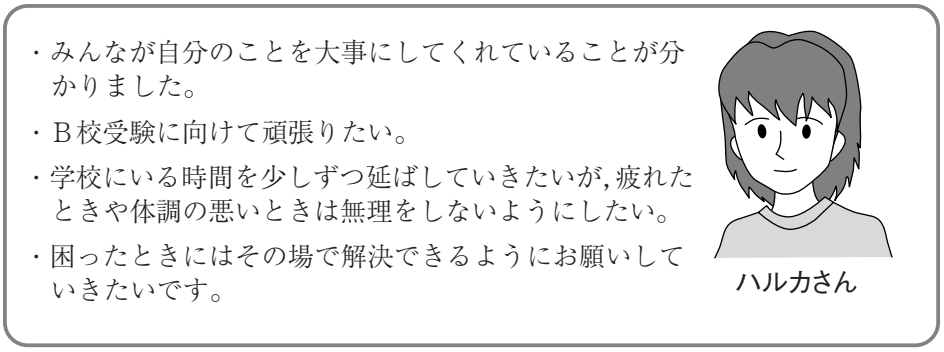
入院中の生活や通院の様子を知る医療スタッフも交えた支援会議を持ち,具体的な問題を一つずつ解決していく方法を考えることにしました。

●このような姿に

友だちと学校生活を楽しみながら自信を取り戻し,受験に向けて安心して取り組んでいくことができるようになることを期待します。

○ 支援会議　（5月9日）

この会議では実際のハルカさんの生活上の悩みを確認し，解決していくための話し合いを行いました。具体的な支援内容と各々の役割が明らかになり，ハルカさんの不安も解消されていきました。



担　任

・ハルカさんへの支援を学校全体でしていきましょう。
・友だちにもハルカさんの現状や気持ちを話し,どんな協力ができるか投げかけてみましょう。
・休んだ授業の内容もできるだけ補っていきましょう。

・体調管理をこまめに行います。
・通学の送迎をします。
・希望校受験へ向けて全力で支えます。

両　親

医療スタッフ

・ハルカさんの目標を知ることができました。
・自分自身の体調チェックを大切にできるよう声がけします。
・心理面の不安については,他科の医療スタッフとも連携しカンファレンスを持ちます。
・定期テストに合わせて,治療計画をずらすことも考えましょう。

個別の教育支援計画　（一部抜粋）　　第１回支援会議　５月９日

将来に向けての願い（◎），現在の生活の願い（・）			
本人の願い	クラスのみんなと楽しく中学校生活を送りながら，受験勉強も頑張りたい。	**保護者の願い**	心身に過度な負担がかからないように中学校生活を送らせたい。

支援目標（長期：◎，短期：・）
◎ 体調面や心理面での不安を軽減し，高校入試やその先の目標に向かって安心して取り組めるようになる。 ・通院治療をしながらの学校生活を充実させていく。

主な支援内容			支援者
学　校	担任	・ハルカさんの通院治療の様子を知り，本人が欠課，欠席するときには，教科担任に連絡をする。 ・進路についてハルカさんが知りたい情報をきめ細やかに伝える。 ・クラスで配慮することについて，周りの生徒に理解を求める。	担任， クラスの友だち
	校内	・ハルカさんについて共通理解する場を設け，学校全体で支援する。 ・教科担任は，ハルカさんが欠課の場合，授業で配布したプリント類が確実に届くようにする。	校内の職員
家　庭		・ハルカさんの様子を気遣いながら，細かい相談に乗り，励す。 ・日常的に学校や病院と連絡をとる。	父親　母親
医　療		・通院の際，ハルカさんの不安に対してもアドバイスをする。 ・受験期の体調管理についてアドバイスをする。	主治医　看護師
支援会議の記録		３月１０日　退院のためのカンファレンス ５月　９日　第１回支援会議	
評価及び引き継ぎ事項		受験前と受験後に高校職員を交えた支援会議を行う。	

※支援会議で検討した内容を「個別の教育支援計画」にまとめました。

STEP3 支援の広がり　と　STEP4 支援の実際

学校と医療のつながりができ，会議を通してお互いの具体的な支援が分かるようになりました。その後も経過に沿って支援会議を重ね，ハルカさんの実態を理解し合い，支援を見直し，方向性を確認して進めていきました。卒業・進学を控えた支援会議には高等学校の教頭先生や養護教諭にも加わっていただき，話し合うことができました。

○支援会議　（２月２０日）

高校入試を目前に控えたこの会議では,ハルカさんが不安なく入試当日を迎えられるようにするための話し合いを行いました。

ハルカさん

かぜをひいている人と同じ部屋で受験するのは心配です。

別室入試ができることを確認でき,安心しました。入試まで数日ですが,学習に集中したいです。

お母さん

入試前に高校の先生と直接連絡が取れて安心しました。

感染症予防のため,別室入試をしましょう。面接も１番に受けられるようにしたいと思います。
少しでも困ったことがあったら,すぐに申し出てください。対応します。

養護教諭　教頭先生
B高等学校

外来治療の日程は,入試の日とずらしますね。
できるだけ睡眠時間を確保しましょう。

医療スタッフ

○第３回支援会議　（３月２４日）

無事合格を果たしたハルカさん。高校生活への期待が高まるとともに,不安も生じます。受け入れる学校側にもある不安を解消するために,当面の対応について話し合いました。

ハルカさん

志望校に合格できてとてもうれしいです。
私のことを友だちが理解してくれるか少し心配です。

病気のことやこれまでの体験を友だちに話して理解してもらえる機会があるといいなあ。

お父さん　お母さん

高校でもこんなに気遣っていただき,感謝しています。
窓口になる先生がいていただけると安心していられます。

Ｂ高等学校の○○です。ハルカさんのことについて学校側の窓口となります。何でも連絡してください。

B高等学校
特別支援教育コーディネーター

教室移動をできるだけ少なくできるよう,現在,時間割を検討しているところです。

医療スタッフ

高校での配慮,ありがたいですね。
必要があればいつでも高校に話しに伺います。
これからも外来治療が続きますが,頑張ってくださいね。

キーポイント

高校生活をスタートしたハルカさん。先生や友だちに理解してもらい,支援を受けながら，自分の夢の実現に向けて頑張っています。入院生活をプラスの経験とし，強い意志を持って次の目標に向かうことができた例だと思います。

教育関係者と医療関係者等，立場の違いを超えて児童生徒を支援していくときや，中学校から高校へのように縦に支援をつないでいくときにも，「個別の教育支援計画」を中心にしながら互いに困っていることや悩んでいることを出し合い,理解し合っていくことが大切です。

事例 8 これで安心！高等部卒業後の生活に向けた連携

卒業後も実施された支援会議

特別支援学校　高等部3年（女子）

卒業まであと1年。重度重複障害のあるアヤミさんの進路について母親は悩んでいました。担任,進路指導主事,特別支援教育コーディネーター,町の福祉課担当者,支援センターの療育コーディネーターは,アヤミさんの進路について連絡をとりながら検討を始めました。そんな中「A市にある施設はどうか」と町の福祉課担当者からの連絡。さっそく見学に行ったアヤミさんのご両親は,「この施設にお世話になりたい」と入所を希望しました。

STEP1 支援のスタート

●12月,高等部卒業を控えて進路について悩む母親

重度重複障害のあるアヤミさんは，これまで３か所の事業所で実習を重ねてきました。しかし，どこの実習先からも「卒業後のアヤミさんの受け入れは難しい」と言われ，進路先を考えなくてはなりません。

お母さん

卒業まであと少し。個別の支援が必要なアヤミを受け入れてくれる場所があるかしら。社会参加をさせたいのだけれど,在宅でわたしが見ていくしかないのかしら…。

ミヤシタ先生（担任）

進路の先生とも連絡をとりながら,みんなでアヤミさんの進路を考えていきましょう。福祉施設等も視野にいれながら,今後の方向性を探っていきましょう。

特別支援教育コーディネーター

学校だけでなく,関係機関の方々とも積極的に連絡をとりながら,アヤミさんの進路を考えましょう。

特別支援教育コーディネーターは関係機関の方々と連絡をとり，アヤミさんの現状や母親の願いを話しながら一緒にアヤミさんの進路について考えていただくようお願いしました。

●町の福祉課からの情報を受け,両親による施設見学

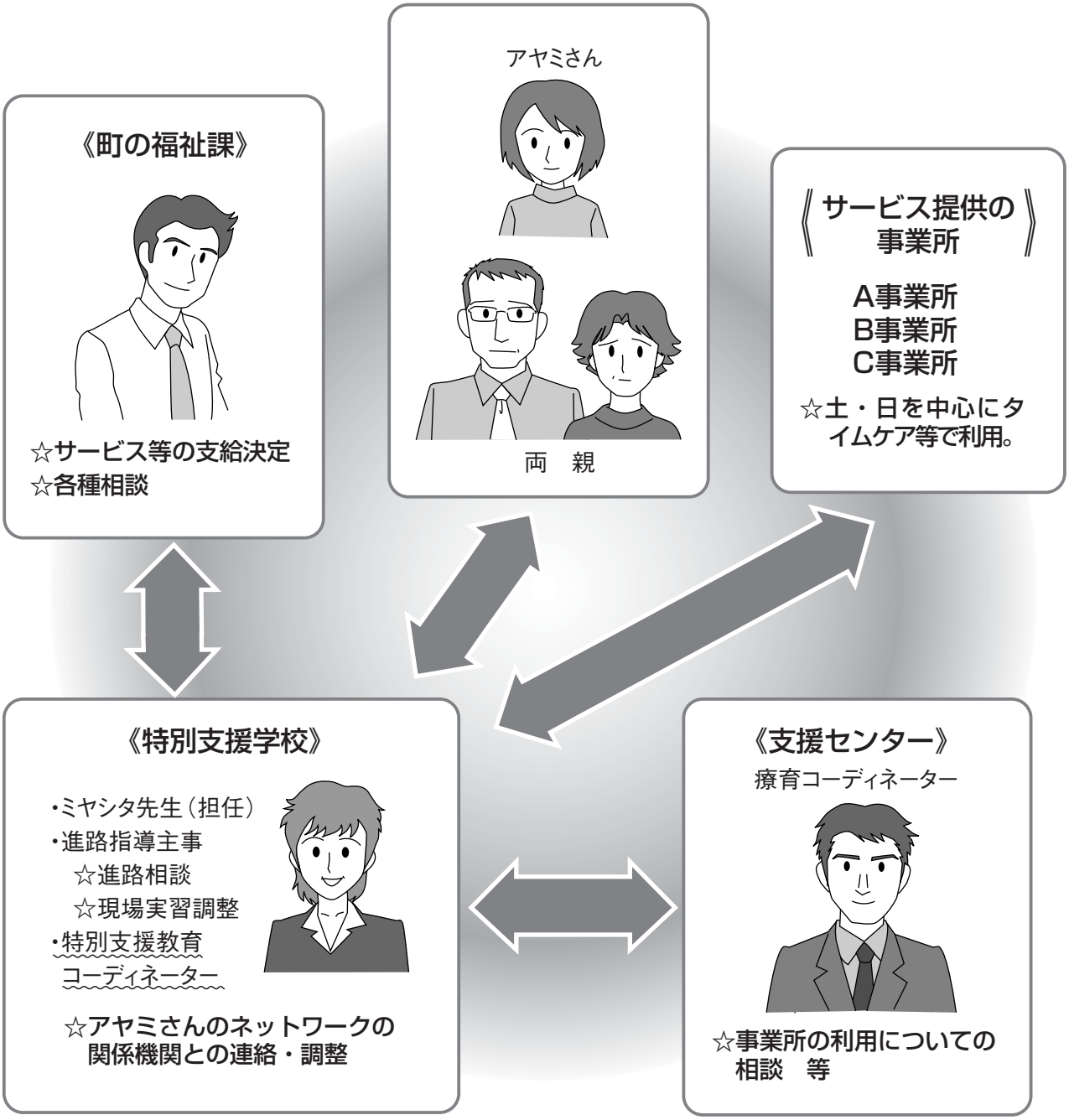
町の福祉課担当者

少し遠いですがA市の施設はアヤミさんにいかがでしょう。一緒に見学に行ってみませんか？

貴重な情報ありがとうございます。できればお世話になりたいのですが…。
実習もしていないので心配です。

アヤミさんの両親

アヤミさんの支援マップ（横の連携）



コラム　～ネットワークを活性化させるためのポイント～

福祉課からタイムリーな情報を得ることができたのは，それまでにアヤミさんを支援するためのネットワークが構築されていたからです。在学中の支援会議で顔見知りになった支援者を日常的につなぐため，特別支援教育コーディネーターはアヤミさんの現状について連絡を密にとっており，また何か特別なことがあれば支援機関から連絡をいただける関係になっていました。これらのことはネットワークを活性化し，日常的に使えるものにするため重要なこととなりました。このような特別支援教育コーディネーターのもつネットワークはアヤミさんだけでなく，さらに他の生徒にも活かされることになり，様々な児童・生徒を支える鍵となります。

STEP2 目標設定　と　STEP3 支援の広がり

●施設見学後の支援会議

福祉施設担当者

アヤミさんの支援会議をお願いします！

さっそく保護者や関係機関の方々と連絡をとり，支援会議を開くよう準備します！

特別支援教育
コーディネーター

第1回支援会議　（進行　特別支援教育コーディネーター）

【目　的】：個別の教育支援計画をもとにアヤミさんについて共通理解をする。
卒業後の支援の方向性を検討する。

【参加者】：父・母，ミヤシタ先生（担任），進路指導主事，特別支援教育コーディネーター，町の福祉課担当者，福祉施設担当者，支援センター療育コーディネーター

アヤミさんの入所を前向きに考えています。今後の具体的な支援方法を検討していきましょう。

福祉施設担当者

アヤミさんがスムーズに移行していけるように，それぞれの立場での具体的な役割分担をこの会議で明らかにしていきましょう。

特別支援教育
コーディネーター

【学校と福祉施設の違い】
☆昼間の支援者が毎日変わる。
☆夜間は入所者50人に対して2人の職員で支援にあたる。
☆様々な年齢の方との共同生活　等

重度重複障害のあるアヤミさんが，学校から施設へ安定した気持ちで移行するために・・・

具体的な支援方法や各支援者の役割分担

・特別実習を組み，実際にアヤミさんが施設の生活を体験する機会を設定する。…（学校）
・実習終了後に再度支援会議を持ち，移行支援の方法を検討する。…（特別支援教育コーディネーター）
・入所にむけて，できるだけ一人で寝る等の生活づくりをする。…（家庭）
・入所時期は，施設の体制が整う卒業後1ヶ月後の見通し。…（福祉施設）

STEP4 支援の実際

●3月,実習から入所にむけて

施設での１週間の特別実習が始まりました。少しずつ慣れていくため最初の３日間は家から通います。最後の２日間は１泊２日の泊まりを伴う実習です。

初日は進路指導主事と特別支援教育コーディネーターが，最終日は担任のミヤシタ先生が施設を訪問し，アヤミさんに会ったり施設の指導員の方と直接話をしたりしました。個別の教育支援計画をもとに共通理解した適切な支援のおかげでアヤミさんも無事１週間の実習を終了しました。

ミヤシタ先生

学校と福祉施設，環境が変わるとアヤミさんも違った面をみせるのですね。支援者が変わると有効な支援方法も変わることが分かりました。大変お世話になりました。

元気にすごしていましたよ！アヤミさんの実際の様子は個別の教育支援計画に書かれたところと少し違っていたところもありました。

福祉施設職員

●卒業後の急展開

福祉施設担当者

施設の職員の異動がありまして…。アヤミさんの入所を6月に延期したいのですが，お願いします。

分かりました。入所までの支援方法を検討します。

特別支援教育
コーディネーター

予定より入所が遅れることになり，４・５月は自宅での生活となりました。母親の支援をサポートしようと，支援センターの療育コーディネーターが，６月までのケアプランを作成してくれました。

支援センター
療育コーディネーター

4月，5月のケアプランです。町の支給決定に従って4つの事業所の利用を計画しました。このプランで入所まで過ごしましょう。

これで私も入所まで安心して過ごせそうです！

お母さん

支援センターとの連携で４つの事業所の支援を受けながら元気に生活できたアヤミさん。母親も安心して乗り切れたようです。この間，学校の特別支援教育コーディネーターも母親と時々電話で連絡を取りながら状況の把握に努めました。

●6月の入所にむけた支援会議

第2回支援会議　（進行　特別支援教育コーディネーター）

【目　的】:実習の様子から，アヤミさんがスムーズに入所ができるよう入所後の生活の支援方法の確認をする。

【参加者】:父･母，ミヤシタ先生（担任），進路指導主事，特別支援教育コーディネーター，町の福祉課担当者，福祉施設担当者，支援センター療育コーディネーター

福祉施設担当者

個別の教育支援計画をもとに支援をさせていただきました。アヤミさんが気持ちを落ち着けて食事をすることができるような環境作りや自ら移動できるような介助の仕方など，たくさん参考になりました。

アヤミさんの両親

入所後の日中活動は，できるだけ職員がつく体制で対応したいと思います。生活に慣れることを優先し，しばらくワーク（作業班）には所属しない方針です。作業は生活職員がついて行いたいと考えています。いかがですか？

その方向でよいです。

支援会議の中では，入所後の様々な場面（運動・レクレーション・睡眠・入浴・食事・排泄・個室の環境設定・医療相談・帰省方針等）を規定し，それぞれについて具体的な支援が提案され，一つ一つ丁寧に保護者と確認を取りながら，参加メンバー全員の共通理解も図られました。

●アヤミさんの入所とその後

特別支援教育
コーディネーター

入所から１ヶ月が経ちますね。その後いかがですか？

入所までいろいろありましたが，アヤミも施設に慣れ元気に過ごしています。みなさんのおかげです！

お母さん

キーポイント

子どもを支える関係機関が連絡を密にし，その太い横の連携から縦への移行が実現した事例です。特別支援教育コーディネーターを中心とした連携は，その子の適切な進路に大きくかかわってきます。子どもを支えてきた人とこれからかかわる人が支援会議等で実際に話をすることは，有効な支援のスムーズな移行のためのポイントとなります。こうした中での活用が，「個別の教育支援計画」を一層有意義なものにしていきます。